



追
門號
卷

旭文

明治三二年四月一日購入

繪本傾城飛馬始六之卷

造り物橋^{アシナカ}アヤリ松原稻^{アシナカ}腰^{ヒダ}の石引^{シロハラ}山^{ヤマ}六ツ
の鐘^{カネ}あり則^{シテ}鳥羽繩^{トリハシス}手のかく^{ハシス}白兩物^{シロモツ}とおづか合方^{アハタガ}
駒木根金丸^{ハシモチメイ}黒^ク三合羽繩^{ミコトハシス}三度笠^{ミドリハシス}と着^キ

火繩^{ヒワカ}をあつ出^{アツス}來^{カム}て^{シテ}衣^{ウチ}装^{サム}の追刷^{アフターリ}付^ス人^{ヒト}付^ス出^{アツス}化^{ハシス}で

「ハテちぶと親仁底^{シナヒ}とく^{トク}ががんどう^{ガンドウ}とく^{トク}ハモハモ叶^{ハシス}四
五の言^{ハシス}ど^ヤすれ^{スル}出^{アツス}て^{シテ}ま人^{ヒト}下^{アシ}やこり^{アシ}取^{ハシス}取^{ハシス}付^スて
ふく^{フク}と^カほのひ^ヒと^カき^カあ早^{アハヤ}く^カ停^{ハシス}ト^カ終^{ハシス}と^カと^カ人^{ヒト}
と^カり^カて^カ今^ハな^カア^ハ己^ヒ取^{ハシス}仁^{ハシス}放^{ハシス}け^{ハシス}る^カと^カ半^ハ^ハと^カ付^ス廻^{ハシス}一^{ハシス}て^{シテ}今^ハ夜^ハ
ち百^ハ年^ハめ^ハト^カや^カや^カも^カお^カす^カト^カや^カや^カ金^ハぬ^ハ痛^ハめ^ハせ^ハあ^ハら
き^カく^カ活^ハき^カと^カや^カて^{シテ}ト^カされ^カ吉^ハ暗^ハ恨^ハ苦^ハと^カわ^カや^カあ^ハる^カ

くあらぬ吏ドヤ此海道をぶりそまかとゆま及んでども候
トモトモが馬一匹に連夜遁げらふ王君へ貢ぐ而用金一歩でモらう
さしに要あらうあらぬ一あともどりふすてせあふスト西人ノカロト
らよこせよかとんびらう老こうやうても候ホドシハ血もづだつも
たゞぬやう承ちうてねらふト一人を蹴起ス一人と戸締の嬉一や
雨も掛あんごドリヤ一ふく吸付てあらふト妙くへとくとく出で
やがほへ到着人アイタミセキダル老ばれめくとくどよよ働いてす
ありグア入と金アミカヤ至ぬ待上をト一人を従 今テセモう
もあい連もいぬ吏ドヤきもせのやあらうかやお意る因金在者
とおもふももう勝ドヤあらうとども遊れずの裏返よく傳て
あく駄賀とくもふぞ裏ふ織グ武百文をやくん酒でも打くとひ

腰骨の養生せんト筋筋つゝ筋と筋のナカニシカガる人のアコリヤもふを
あらうか一合点ドヤト抜てくる金を手にうそてあらひアリヤうめト
余が称ぐそくとえうて妨げむろと生ても並れぬがら放とう
ごむろげト足がなアソふぬうしやうぬうじもヘトあん切ううきあ
トちう黒服二きのあにあにゆうけ金を手にうそてつれと生二人のアソムキハ何人ア
皆うあるものでう社者せあどあら合せえをすほせび二人の盃絞
御老人よ多幸のあらきえうてらふす生すア生歎フハおうすひ
えくサモお出まよかアヒテ御深切あおんトやのアヤハ内
あれハ稻村うらうて出と寝ねめアコリヤが商賣と行で形广モ
のドヤ一宿あううろをうづぬ御老人よ多幸の向ぬいきはぢよ
ううういても叶のめとードやううて往来の妨げもるとて肩が承せよサ



御老人よお出あはまへヘイアキサメルトコヤマシナム世老ばれめ
懐中又金あらたり武万安ハ持モアリ一旦うそく代えモヘモテの
孫ニテ遊ふるの所广さうとうぬう先ヘミシナであすふハテ小
一やあやりらぶらもんにうごせヘ行トトモトウカクムラガヒト
瑞ノ野广ハ拂フマニ後モのお世話御縁もあふばまゆて拂れまし
でうるアイヤくお仕あづくお付トさきく一拙者小津用ウ一あ
らび間お付トさくふトおめやう金方ヨアリ雲のえーうげゆ車スルナア
出合すも縁や寂かうのあひび一旅も道づきア人スルハ情威
一んく十カ其にひある誠のお付トアケチヒト拙者スル御
んぐる何と咲原けてトさるやういりアヒシテ甚御幸ひち一拙者
も故ア武士の黒浪人のアトおとすアレシ一人の母とてじうじう
つたんと碑く折もおと母の病氣ブーハ參スルの力であバ取囃スルて
今今日と後アモ此モテ觀とア殿と多念トハ思ヘドモカヨ
も及不得貪の病ひ衰スル盜械スルが見極スル一実殿の腰中の金スル
大方武百兩ト令古事スル近は多様々更ドヤガ武士スルあひ志スル
間御備用ナムお付行革スルてねアムアシテトさるハテ
思ひじけあ金のをく寂前トお世話のくふもとヤトクスル無
らと此方も主人の為伴スルが忠義立モバ武士スルきめとヤツケア
氣のどスルあぐスル此氣も叶ひヤシトナガトモテ行スルアリヤモ
貴殿スルがをあれと最前スル財盜械スル切らしても御先スル山械スル有
吾スル被連スル宇殿スルがれめ命令と助ケスル者スルアモ

ああ、どうも何う身共と云ひ美利と云け此金と謀本と云ひて取人を
りあねちるやうらと云ひテよし仕事をあすト やうふと云ひとゆふとゆひて
付ふうらと云ひてア「初人ア小せあひても船道ア金子アしとがみぬきにし
候ア」と云ひてゆる。 「初人ア小せあひても船道ア金子アしとがみぬきにし
簡宜金アと一アいやでうる裏放アうやすれト 骨筋ア切アてゆくふととくに留アり
冷アき方アあらゆる金高アありウントアそれるす焉ア」
びつらうアして武人アがまきやくくらかアととくに留アり
老人アあふ近アのあやれア「ア 比喩アえののくらかアと思ひア」
紹アト 切アくも十アきの鉄人アと云ひア「ヤセ廉アわづふすれをゆくらと同れで
あひぞア一ア物と比喩アえア」ト切アくも角アあ人の追アを令アちとア切ア十ア右ア筋
令アくさりアと云ひて
「今に晴や盛綱アのあふくらと母ア死アるのちやううアと云て二ア人アと見てり筋
あひの通ア令ア方アう指村ア、「コレ」北侍御老人アトアめぐり引アえアまアと云ひ
東切アうナイ此夢固アと云すの爲アア毛北アもあく船道アがく世食ア

おづ儀事よりト特とちりとせが、金紋布とコリヤ守り、袋ト通帳よ二万
兩余く、あひト今とくとゆきへ、寂の勤行室らでこもりて、ゆ
人子息もあれべ尋常よされんが此守り持ゆう位牌と思ひ
朝夕圓角とトをと食そト、ズドモト入ト弱本格ハ、陰陽門前をうすを
とお出まし、一撃もかうひの日和どやうもせど、膳もせど、人と
きらびのよき日和ト、幸がふへうト追ひが、エウつまふ
の、ござきうの、近人をやそふ、此まよ往來の、まゆ中よ、ごく
やのト、熟ひ、ヤアと、もや切く、マニヤア、や汰み、切やと、
達が、此え、察ハ、ト、自らをえぞ、まく、コリヤムヘ、タモ
る、何者の、あざと、人ゆ、ゆ、と、ト、あ、ト、もと、と、あ、
ベアト、テヨン、ノ、幕

造り物三間の男女廊庭二階の併見附唐紙檣がりの方折返う
とおぐり場上方の方同じで二階椅子を一面よやまてお
道具よ好むわうれて鷹原傾城屋のてん幕の内ようけひせん船
諸賓漁舟の肉着の形りて簾子小ぎく尾上引み戸内寄
く同く肉着の形りて簾く隠臺よひひむろもぢば上方よ
狀と虫とあらるの猿えぬひ引み戸内よ髪の筋を五つして
秀う美うらへけの花を入に小ねとおまか歌うとおこゑる
小菊ねのへきトの方とて向ひ合せよあう駢駢の三味線とけのこ

一てあす世奇とそ幕和

角コイナア小ぎくえん尾上えんねまく方のけのあを下でまくよんせのす
産

さんモウ三味線をとくうて「うらも先浦金よとせてなまく
ナトツ浦がをへまくよが」おさく「くく象母えちゆきよとくあまくよもけ
山「もみぢのすき神のまく「ちかく入ひよぐとの傳よだるの
のよどあゆのよこすやかくあれあひとやものよ「よみぢみぢみぢ
神のまく「うトヨー「ヤ大音の絶ひと角屋うづうと
えんよこぐ「サク「寛浦を浦のよのよとよあひとよんで下さん
せいか「くらや坊金とや業手金がくくふうす「ちくぢよ
トやく「うせう「夜の夜とやすと宵よが「めゆうとく
のうぐくふくよとくうん「ヨ小松其名と大文字すをへ置けてたもや
川「大ひいく壁の内も遠れど「何ぼうめとよてもひ返

吏のあつと大方難づめがま付て西へまつてあつふとアト候と
云ひ候。而もかト金きつるえんやトやまア「お」の金きつるをうま
ぬまうやア「お」かト金きつるえんやトやまア「お」の金きつるをうま
ヒヤノお方どふも元時もよむあれぬまうやト候。新造のむらち
ぬらううううううトやまア「お」の金きつるをうまヒヤノお方どふも元時もよむあれぬまうやト候。新造のむらち
あがう尾の「あがう」夜と毛くらわも絆。マモウヘニキア
ハシナトカスと「葵浦」さんたあましやんせ子供大將してうさ
がくことと「イエナチラ」と辻石が石ふよそ「追付揚尾の
を車をふるうのへ「行」させまうめが「回」は葵浦をへ追
子あがや「葵浦」さんと又あーのをねやくも「これ引
付揚尾のを車をうんとあましやんと又あーのをねやくも「これ引
あの戸川とがまてトやむかもうすやうぞ」「マ」あ何もうもう

かて居るるるア「ト」^トまきて「戸川」^{戸川}大て「輝」^輝ドやあくらのア
ア「ね三人ともふるべ天文季末の海東家恭^恭とせんよシテ、^{シテ}か本支
あひくへ「身がまへらのよあまで何時でも揚^揚入ら、そろこの
タア「太もドをとらへて葵浦^{葵浦}の精^精りよのア「ア」そつも
ヒ^ヒトやらんせぬ^あの^アもむるうじなもドやまの^アでうん
のひなア「ヒ」^ヒ西^西か方^方ア「ト」^トとどりとそくあ^ア勝^勝てし^シ侍
めぐくとくくさるの^アりやで^アうな^アのア「ア」あ^アと^アん此^此を^シの
の^アもひ生^ア「今^ア一^アジの邊^邊も^ア「ア」^ア候^候寔^寔よ^アと^アの^ア
「キ^キく^キう^う」^ア「^ア」^アて^アの^ア「^ア」^アの^アお^アく^アア^ア被^被か^ア方^方
候^候キ^キく^キう^う「^ア」^アま^アト^アそん^アせ^アの^ア「^ア」^アで^ア有^アう^アあ^アく^アく
正^正の^ア知^知ぬ^ア顔^顔「^ア」^アと^ア見^アの^アド^アと^アま^アじ^アて^アつ^アま^アじ^アて^アつ^ア

居るるア「アをまわの言付で又市んをりりやうふ連てもどり
ありくらア「モモヤトモ遠きものア」のア又市
有りて彼ひがあもめぞヘ「あとのあくねのとつ廢りよかと類」と
太ての悪性あまドもんせぬうち深浦さんねまのモドやぞ^モ
黒毛合戻^モやとあゆのあ外で悪性^モ思ひて一たすめ
けりふうつぎすもきのそうちやあつまのア「てつあてそ時^モ
キニシ方の身仕すし部家でも色^モ」^モ「これも勅の申み^モ
ふあ事^モ「ほんよ悪性^モ男とつひううてゐるとそれ^モくひゆきを
がまへとひち^モア「ア、ひぐも圓^モ秋のやがれトや^モア「そんあすむ^モ
がくを盡^モもく定^モ妻のある船方よあれづ^モあむな^モとトせ
事^モ「^モ今川亦お此處^モとあづ
思つても女の方の用事思ふ妙方お連うるがい^モ今川亦お此處^モ

めのじやうとひよア「むすびんのお方のむらとりひ「相魚へのれど」
文子のうふあら「あ」のむの林又市をとひ「もする悪性
もの三で死「あ」れておまえがあるのうこし安浦「んせよみを
絵べあとぬあがあるこれく「はき」とえやまゆくセ「ト競争の弱性」
駄「甚ずしき行じやへ「あ」はすと又市をが大更「よ」けをおて市や
志やんを食の筋ぬく「が」もと思ふてあら肉人のえぬふてらよあく
坐てらうあせんとおよひてざすよ更で此「まも」と大更「よ」けさん
とと幸ひゆく「よ」回さればハリと多き顔色でイヤ是「モ」字の三が言
核互「よ」送もせんとひこうと起續「よ」やとつぶしてのうア「よ」くそ
つやおつるの更「よ」ト大よび内「そ」れが事「よ」方ありね「も」も紫「よ」
りよまじよまよア「そ」れが事「よ」方ありね「も」も紫「よ」あみてうりと

さくやあくよとるや 一もあこへんや こひの事ひ
まじまき 指紋やの花紫もさざうたふて おやびへ サアのすらまくぬ 彩造の
うさぎあくあめくさううう が深よ言うて あく男と罵りといふを
うめうめとうううわく悪性あとひあらんと新造づとざよ
ものうみコヤ寒浦えん耳がくはつひあす ほんじよむあぢらかん
うみてねくれせあのとひやあくとひあす ひなしとひだりとひだりとひだり
すかまく支まくせぬ心わすれむけことと、おもんとあへ へ食食でん
をゆくのなによく まちうとひだりとひだりとひだり
又とひだりとひだりとひだりとひだりとひだりとひだり
食ふされで二ぶんの起緒トやと言奉ふゆく和めと口ふてそく
と取て奥の門へ移りよ渡して三ぶんと終義をもとめとぞ

よひて下さんアノ男づと詮義^{シガ}にて邊ゆきゆつ。う
ねまの方とアレんじんがい又市をと詮義^{シガ}とつて
フリヤミの哥がきと不でもあひよのナ。幸ひ大文字筆の御筆^{モリハド}
戸川^{トガワ}と達あて早ゆく。ト皆歌題^{カウジ}よどびのを、蝶^{テマキ}年^{トメ}
七^セとえ^{トエ}とおはすいへとアドヤ大文字筆の伎があるも
絶^{ゼタ}のんと^{ゼタ}もせく^{ゼタ}サ^{ゼタ}と書く^{ゼタ}と^{ゼタ}と^{ゼタ}ゲ^{ゼタ}よの^{ゼタ}ア^{ゼタ}イ^{ゼタ}も
てててて。愈^{ゼタ}うつぬえちねれが^{ゼタ}のをまぢ^{ゼタ}。富浦^{マツラ}真^{マサ}ト
ア^{ゼタ}ム^{ゼタ}ン^{ゼタ}ア^{ゼタ}イ^{ゼタ}何^{ゼタ}か^{ゼタ}男^{ゼタ}づ^{ゼタ}と^{ゼタ}う^{ゼタ}く^{ゼタ}ヘ^{ゼタ}ト^{ゼタ}ア^{ゼタ}コ^{ゼタ}も^{ゼタ}ア^{ゼタ}コ^{ゼタ}も^{ゼタ}く^{ゼタ}。コ^{ゼタ}も^{ゼタ}目^{ゼタ}が^{ゼタ}よ^{ゼタ}く^{ゼタ}ト^{ゼタ}き^{ゼタ}。

監也
是より
監也
はりと
う等もあらぬとゆき
一ちくとてまことく
物語あられませ
監也
ひ
まもとあらぬ
トの事
地
あ
とあ
がのこの事
の事
あらぬ

卷之三

下りんとおのたへこむとへ遠きものトドヤ一風傳とへどよじや「そ
モやどり。凡んと背骨を「三ツ骨の吸わもと」す。やく一轡
あ揚を。脾あと、とくに「背せぐん車」。寝で、うつひまくびよ
で、うつ車。」のこつ車。うちらふ妙地子。玉供「アイ」。下りの文布
小返前迎されておがづられぬ。アヤく下よいや事んせんアトツク
み。轡く「來く」。西向あくや、仰面くんづく。でも、毛がだら
毛をこちやとくんづくの事ひとと。當上もつけもせぬひづれ聲
もくらへて、身を「来」あいととくこんで、あくぞ。アヤく「四上毛」
タマト。御車とし。のんあと、唇でこゑとふ。ト音と又「まう」。すえ
替り名付の次方。トツツ。二役二役を行。若勞トや古。下り
一ツはおぐ。「又市をのめうげて、うき」。御撰聲があくどり。

又アヘででもあア勤のまゝのみトやトは肩ねがヘ布のひわアすれ織
市モトモ
アモモラヨイと食をせふア是ヘ布の面を失礼の際其の平市用
市モトモ
於ヘの廓のせびよんをアヘアヘモ又ヨウル皮と碎てゆる
市モトモ
粹大弓をめ一松づ市の正とつか篠倉武士此朱雀の郭
市モトモ
原と見せふとゆふて今のも此大文字をとあんふて
市モトモ
ゆ出あられさうアリムも今朝うちの太陽奥の間で燃れちま
市モトモ
傷ゆもあらどん又此太、盃のゆう石があへうと思ひて宣へに又布
市モトモ
す、辛ひお合ヘニ益そらふとあ、ト又布ヘアモヘ頑鼓邊
市モトモ
主とくと古いやうのアハシ監物取アキアレ牽引又假合ぬ又布
市モトモ
麿者少假合ぬよ、肩拂ア其苦でう世大文字屋の亭主といふも
市モトモ
原三節乞情とや浪人又此牽頭も林又布とて望緒五浪人

てらる市。今此九条の廊くらわ又新廊しんらうといとももて勝原と遡関殿そくかんてんといふを
此家の亭主三郎吉清其方とまさがそようス。さゆうでうれる此
冷泉万里の小路くさりへの廊らうと柳やなぎ。世家の下しもへやとねが身みひ
付つ。浪人のあで武家ぶけの仕官しがんとをもせと。廊らうを建たてるに即そく
要害よがい。布ぬ。名やサ陽氣やきある廊らうの宿跡しゆせきを林又布原二郎吉清
傾城町きんじょうまちの古吏こじ來曆らいれきとす。あく監。やよくらふ。木とト。や
く。ナアく。坂さかをあづかう。ト。やちづぬが生うま。めよヤ上あす。でふ
らよ。と。仔えん。その様子ようしょと。合あとト。やうのアト。是これト。入い内
門もんを。柳やなぎ。一柳廊いりやなぎらうと。もと。近ちかい。万里の小路くさりや冷泉れいぜんのえを
武將ぶしょうの東ひがしの御湯ごとうの地じであ。されど今へくまことにありふつも
桺いは。がくゆ。と。のた。出でよ柳やなぎと。うて。くる。又。お客おぎと。折おり合あふ
諸叟しよしゆ。柳やなぎ。を。ごの。正月まつり。雪ゆき。を。寄よ。の。も。で。六条三筋ろくじょうさんすいの。揚屋あげや
宴うつ。来ら。腰こし。又。柳やなぎ廊らうの。勝かつ。よ。朱雀しゆせきの。壁かべ。通とす。い
を。小立ちだて。ばけ。柳やなぎ。町まち。出で。小立ちだて。柳やなぎ。と。衣紋檣いもんぢやうと。名符
紋もん。ほくら。ふ。而と。衣紋檣いもんぢやうと。入い。ある。ねまや。の。軒あ。ひ。や。衣
つ。た。づ。き。ぬ。よ。遂と。以よ。て。業わざ。ふ。客お達たつ。の。名な。あ。と。お。し。る。よ。と。植は。す。中なか
間ま。く。揚あげ。屋や。の。算さん。と。も。車くるま。と。よ。是これ。み。も。い。き。の。あ。ま。く。と。
桺いは。も。佐さ。ふ。活は。よ。ら。よ。と。す。て。又。よ。も。も。車くるまの。文。字じ。も。も。ふ。ぐ
る。よ。緒叟しよしゆ。し。や。小。盆こぼんの。ぬ。う。く。車くるま。板いた。ぬ。よ。の。が。も。車くるま。板いた
。傍わき。あ。も。業わざ。と。行ゆ。る。後あと。海うみ。よ。鳥とり。よ。ひ。磯いそ。よ。人の。舟ふな
。あ。も。笠かさ。よ。も。一。も。下くだ。尾お。す。船ふな。の。位い。と。よ。更また。と。又。秦せん。の。始皇し皇帝。

御狩の向あとまのき 松のうげをまと経と玉つし 余風と今小き定
のを支を松の位にては神磧室の津や清美め船の防ぐれぬらぎくすとで
み色くめ 一うらひとまえ乞夜の鹿麻の意路といあざれよ 三弓
き支をと引や堤の緑と纏 けのことと稱め系みよる あとまう持
居や 一のこめいとよはる こもる黄金の威光山吹のもとらうじへ太
じんをさよ 木本
尽紙花あふべ私よ 一もあくの厚うへる高椅子嬢女郎 一わらが
みのとくやうもすゞ新造の船お色紋日むぐともそれく まくと
てやうきめつこと聲耳 一やども往みなのりまよ 一國ふせでにとく
こんで湯のわくじの皆殺し ト又争、志うぐん 一且取られとみがる
あとくつとと此とく 一のめやうくへやきゆふト大富とく 一乞ふまゆ
とく大浴ドや 一そくとくにと自喜よトのほのんとおも喜び見事

市
引での縄張 一林赤布 ト引ひと 布
「百子軒」^{ハシマダラ} うよひあてこようのへやくとさそいとせんとト
女 おねねのやへ布の正監あも、やひあくやく。時くせひるはねどてられ
監 おねねのやへ布の正監あも、やひあくやく。時くせひるはねどてられ
一布の正監 一る鹿のとくてお子へだめせば、身共が推すと小遣つに
まくらひ西 一た子浪人此井産業へ廓とむきへ東方と集つ
とうでのう魚 一本陣を名まの那彌倉より討手の役目とる
ちこゑあくと栗崎甲斐の勝 一へうふも百姓元と恩ひの外まづよ
歎甲斐之助と出一戦よ夷也とあども年の功とあさば草をさ
の忠義 一はま幸ひ甲斐之助も世廊通ひ則更の間小ぢやくの
体あれが氣づくひとくうすい 一モテ監物くあくと先達て十入
身 あけくさ 一あ
時まへ下 一後づ御教書い 一其氣を栗島の家守ハ代舟を售と

もの もののとく ひき う者よ盜取て後でよす内をせしむるがいのあはれもくすをぬ
此身も不き身 せひ甲斐之助とあやい付るが 一ノ万更も重つて
市 の 市の 丹の小えん 市の監物也あやれトテテ布の心監物どきゆへてりと
栗崎公へ代傳代事よりけて女中もくろづくの
櫛かくがいかんじ耳うに齧じめ茶と兩ぞ 一後さ其胸よ小うも
ぬうちがみ本敵龜軍とよとの侍誓がでらるトテテ出で本敵の十事
御物花 一ほドや画角の吏とつてまことあア 一らやとすの
アアト三人出てまこと 丹紀元名草の郡か箇栗崎公の代傳代事
ふらふ股がなげてまこと栗子でもくう者のあきうでも大東あつま
食ふとの侍誓がでらるトテテアリとね 一レキのまや栗崎公しや
うのま栗崎公あらあまきまくにしてまか 一かかドカト
ト

あらま栗崎公がほじや早ふきしてまふちめりとね 一ト
あらま 一トおでらりへひでとせうがぬぬモウ男の味とねばてあらぐん
あらあけとばらふもよねうぬとトテテうらうとみ 一めくよまく
くももあれ坐蒲小よとまびとがざすて今クルニぞのふト
生くまくあがく 一栗崎公へ代傳代事 一トらもドケ
やうもえとどくよとまびとがざすて今クルニぞのふト
トらもじあとくよとがざすてまくよと耳のむらうてまくと 一ア
ヌア 一ア栗崎公がじよのまア 一ちんふくねす人を甲斐之助
の 一ア 一ト油うらる 一トおやめまへ 一アとまくよとがんじくそれ
やうもじあくのねやたで 一産の親の御事と見ゆうと付ふとお
き 一さよひも 一まよもと 一まよもと 一モロ 一モロ
てまくと左の娘 一其時のねはな 一モロ 一モロ



トおもひはあつて少まよコリヤ此むおせでりうり
二つのひきと出でしもよコリヤ此むおせでりうり
のふたへうづぐうであてやひとゆあが此女びよ
されもせざせうとあひ離もゆきひはく粟ほの代傳幸ひの所
あひ御あみの経そへたうこせがトひまがと
きのすーとあひゆかくづれが体お令島がのぬ
うみそせをちうをとくくちゆきまきくらやけトやつむ
よふ出てトさんくさあアアハイタニシマキ
トくわなが、アア又アや死人の栗の
めふくえーのじやまくぬが車るべくねくのるくうんじや
そく云あんちるあぐつてぶナアトニシムチ情とことじくづれてもも
一西よアコシキ支金ねまへばふでも揚の大手小うけがよふすまく行
下が

のひあーあーそくへるーやアノ客の傷みあら更もらやドヤコ
アアアイアく令島がりぬおあアノ大手と二人どあーてうこひよつて
じやあくモテモテゆくらむとつてギキとモジのとゆつてう
ヘモヘラうや付てあくのトやうのあアアドアでも其様子と申る
がえ付このトやうのあアソんあじわやくどふぞ彌捷人よ成
つてあらまアアイアくコーらかくらかまちをきくぬトやア
ぞおむろのアト浦野お浦のまのとひアマクアふうでゆ
こととようのト姫^ミアほんま中の間へ出を吸おとトみを
みうちでアコリヤどふぞかへられやうのアモハとぬうとぞアヌ
きとあひはうぬともうでハモゴク小ふじやぐとアドアモ
がんあひまよの波うがアツ川をめおれアトとくすとあく

甲のうへ
一州甲斐を助かる軍主として今宵を宴でたる。むはとおれども
かどひうのまゝのまゝのまゝをらかにとほよせられ。おほほりと見て
窓やあづぬる。トひあらの方へこよし。あづらまが。ナリ。ひちがふ
これどす。やぞいふ。ナリ。や行ふも。まへまつれど殿さん
あひよ。下をがつまつと窓邊でやすへ。是新造などあるもの
のへト。ひうらがおをらく。ナリ。新造など。やちそれで。ゆきので
あふ。太も。引付て。手のものを。トやコレ。あづらぬ。ナリ。
モウかんふみて。やうぞ。ナリ。あれらありと。笑ひ顔が。出で。ナリ。
えて。れ事。往。舟。を。ド。や。ト。ひ。う。ら。と。引。よ。せ。テ。ナリ。や。か。ま。ひ。ら。の。は。う。ら
で。う。や。ア。ん。す。り。行。ふ。も。え。の。石。佛。ド。や。其。そ。く。で。も。あ。根。が。因。舍
ヌ。宿。つ。と。御。息。女。ト。や。さ。う。ひ。さ。う。そ。ん。あ。と。と。ト。あ。つ。ま。ナリ。アイタミ

岩殿のまゝ。ひよごんを。まへ。アリのまゝ。討。ユリヤ。津。り。な。あ。ぬ
まへ。アリ。城。い。が。お。へ。や。う。あ。ト。皆。く。作。山。下。三。三。三。山。や。作。山。下。ま。ち。の
御。加。努。一。画。も。く。と。あ。く。ま。う。經。小。の。揃。へ。ど。と。む。入。て。ま。ア。シ。ア。シ。ア。シ。
坐。上。陣。と。ア。リ。上。陣。も。行。こ。ト。レ。と。つ。ア。一。脚。ち。切。よ。行。後。見。あ
見。ざ。ア。リ。ヤ。背。く。い。づ。れ。も。ま。う。ま。ぐ。く。身。結。ト。テ。ナ。セ。ふ。ト。此
事。ち。高。い。と。出。く。甲。斐。い。の。ま。う。ま。ぐ。と。く。め。岩。殿。の。お。う。う。ナ。ナ
其。方。も。ア。リ。お。も。の。御。家。主。ト。や。ま。う。ア。ナ。想。え。忘。れ。き
さ。う。ア。リ。ハ。代。丹。た。め。で。う。ナ。ト。ヨ。リ。事。な。も。ら。と。ね。え
邊。あ。史。が。あ。て。ま。の。む。ぬ。が。あ。る。く。通。け。て。り。ふ。ナ。ア。そ。と。と。ま。す
が。こ。う。も。が。ア。リ。お。れ。よ。き。の。ま。コ。レ。釋。で。ま。い。う。ナ。ア。釋。で。ま。い。
ナ。ア。釋。で。ま。い。う。ナ。ア。釋。で。ま。い。

「あづれえでもあまく、後をうながす」
やとうて食ぬがゆく、それをまへる。
神示がゆいゆく、トモとよて三ツのねぐら。
かのぼつてなるの、ゆくよむ去りとくのぼりて。もとれんやねん
「せんと氣遠ひよらびしもトや、ヤア若殿がへとふよきまを
と一あよ今比も莫つてうらうや中おや、公の東ドや、
一兵若殿、ハテ無とまくの軍若元もそくとのでトやこいと
きうて、やせりぞれども、ドレぬよ水の湯をみて、あ、ト
ウイトやへ入るもみちうのむろ、アヨシの折角も、ねで、石門道
軍まのて、ひとぞれを、あ、みとぞ、若殿の牽ひふあとあくまと、
もあしとお、以前のト、とぞ、若殿の牽ひふあとあくまと、
小あづぬを、船の海へ、じやあ、アヨシのりやけと、御このもので

「あや、^{アヨシ}、若殿の今の様子を、^{おまめ}、此陣も見えあらずト
あ、^{アヨシ}アゾノヤメと、^{アヨシ}ト、^{アヨシ}若殿と今、^{アヨシ}お
ひきあやて、^{アヨシ}生陣さとく、^{アヨシ}小は、^{アヨシ}ぶやひ、^{アヨシ}ト、^{アヨシ}軍事の内、^{アヨシ}ト、^{アヨシ}う
あううそ、^{アヨシ}お、^{アヨシ}その、^{アヨシ}其の、^{アヨシ}女を、^{アヨシ}夫と、^{アヨシ}う、^{アヨシ}一の休、^{アヨシ}スリや、^{アヨシ}此栗崎
の軍勢を、^{アヨシ}は、^{アヨシ}お、^{アヨシ}共がゆく者、^{アヨシ}大おまえ、^{アヨシ}へ、^{アヨシ}味の、^{アヨシ}ヒビ
ト、^{アヨシ}えらうて、^{アヨシ}大切のめだり、^{アヨシ}うるわや、^{アヨシ}成、^{アヨシ}一、^{アヨシ}奉の、^{アヨシ}皆、^{アヨシ}國を
ある、^{アヨシ}あ、^{アヨシ}と、^{アヨシ}う、^{アヨシ}練、^{アヨシ}妻、^{アヨシ}此、^{アヨシ}久も、^{アヨシ}以、^{アヨシ}お、^{アヨシ}物、^{アヨシ}が、^{アヨシ}將修造、^{アヨシ}五町、^{アヨシ}今名
草の、^{アヨシ}塚、^{アヨシ}又、^{アヨシ}龍、^{アヨシ}名、^{アヨシ}ある、^{アヨシ}勇士と、^{アヨシ}尾子の、^{アヨシ}由縁、^{アヨシ}狗本根鷹の、^{アヨシ}様、^{アヨシ}と、^{アヨシ}が
ひとそりて、^{アヨシ}栈、^{アヨシ}力、^{アヨシ}猪、^{アヨシ}今、^{アヨシ}久、^{アヨシ}の、^{アヨシ}絵、^{アヨシ}ぬ、^{アヨシ}軍、^{アヨシ}必、^{アヨシ}要、^{アヨシ}名、^{アヨシ}家、^{アヨシ}の、^{アヨシ}付、^{アヨシ}く、^{アヨシ}上、^{アヨシ}二
陣も、^{アヨシ}さば、^{アヨシ}廓、^{アヨシ}の、^{アヨシ}ほく、^{アヨシ}其の、^{アヨシ}お、^{アヨシ}も、^{アヨシ}又、^{アヨシ}僅、^{アヨシ}け、^{アヨシ}人、^{アヨシ}爲、^{アヨシ}の、^{アヨシ}画、^{アヨシ}スリ、^{アヨシ}ニ、^{アヨシ}各、^{アヨシ}人

少々「コヤトみちうこみ」^ミ「むかし」^ミ「もやく」^ミ「ハリト母ちかへ」^ミ
「それとも「國立ぬやう小そち連へ東さる小むくへす」^{テモ大らひの}
「えもまひあいき」^ミ「吏あじばゑてのお事ゆけう栗峰の軍勢」と
「へナ令兵」^ミ「署すすき」^ミ「あけ」^ミ「ハリト母ちかへ」^ミ
「あつてゆへ絶ゆどぞりゆあへぐれの令方ふかせうるあま
「そらや修妹トや」^ミ「アイガ」^ミ「のといふ修妹アノ修妹の文字へ」^ミ
「くもじくると徳」との事^ト「此後承よ揚慶」といふある入邊寧の
「とも小かと云て軍用のきを其外尾子のうせ者も」^ミ「或ひハ修妹
「ひまゆうき小ちがことうへて此時原よつとしるも皆丈」^ミ「のたま
「中國の曾にのほん等十右衛つ女房」^ミ「わんこ」^ミ「瑞師ち活

の音つて籠のきをと知りも大年の大遊名草へむと運ぶ緒士林西
「とあづいであらゆ」^ミ「そながへた子」^ミ「のむこと」^ミ「のむこと」^ミ
「此三味縁」^ミ「ヤ」^ミ「要害うなだくつん御武さのちふとたがやさん毛へ
計上う三ぢう」^ミ「名草の株と本としよ」^ミ「三筋の糸を香仁雪」^ミ
「トも大お四郎が軍配」^ミ「自多玄糧と承庵よ」^ミ「狗本根ふ生と財
き」^ミ「あくべ」^ミ「幸ま修妹のきをあく撥する高くもとほし」^ミ「味方を
うきを歌ひすゞりてさうだ歌」^ミ「其歌じよとよ」^ミ「二へを咸乾」^ミ
「のおまゆも」^ミ「蒲倉と京」^ミ「まお方の」^ミ「むかごう」と
「年うへがまゆふる」^ミ「ト」^ミ「のあくまのこうちもひへうりて」^ミ「まとせ」^ミ
「のくと碎くも皆たるのう」^ミ「ト」^ミ「あくまのうと一」^ミ「あくまのがれのう」^ミ
「めだうちまゆうてあまゆ」^ミ「ト」^ミ「あくまのうのへ縫トや」^ミ「やう市を

朝よりは遠くの山のまア「アリ」極く我ホガ意のちーの、ア「おまえ」と
 いふとさうしていやあへとまア「阿の色」奥壁まで双六のうけ
 めて見えまよおきてそそでめれとア「ヨイ」ア太史の身のうへ
 ヌあがやしもひ夢とめト隠して縁が其事うふかきんとあき美
 見枝おがゆと見ゆきまア「ヨイ」アおまえとそんすふぬドやせん
 せぬ今更ア「又」ア「ヨイ」ア二階へらりと夜赤のみつむと
 トヤシムア「絶」ア「ト」ア「絶」ア「ト」ア「絶」ア「ト」
 中へ落葉の如きハテおもろ室の氣色とトモゲウもも大墨もび
 きうとやうとトゆの一墨と小辰も南面にて動くじ氣墨を少回
 たんとぞ猪も白毛東よたもぎへ「もんぞ」まづいも曳下と
 えぬえ「本珠名草の珠」は變あるの但「木柱の上」は圓の
 む

駕籠ひ「ア」ア「ハテナ」ト「ヨル」ア「カウ」ア「キ」ア「申」ア
 実ふ舌や「ア」ア「モ」ア「小」ア「ア」ア「大」ア「ア」ア「申」ア
 びざんせの多ア「ア」ア「モ」ア「ア」ア「ア」ア「ア」ア「ア」ア
 緒ア「ア」ア「支」ア「モ」ア「ア」ア「ア」ア「ア」ア「ア」ア
 あれア「ア」ア「モ」ア「ア」ア「ア」ア「ア」ア「ア」ア「ア」ア
 トや「ア」ア「モ」ア「ア」ア「ア」ア「ア」ア「ア」ア「ア」ア
 ち「ア」ア「モ」ア「ア」ア「ア」ア「ア」ア「ア」ア「ア」ア

